皮膚科

a. 体制

2024年度は5名体制で診療を行った。詳細は以下の如くである。

主任部長：

吉川義顕（京大 1991年卒、 2017年4月から当院勤務）

副部長：

古賀玲子（岐阜大 2003年卒、 2010年1月から当院勤務）

医員：

山上優奈（大阪医大 2010年卒、 2017年1月から当院勤務）

臼居志保（香川大 2017年卒、 2024年9月まで当院勤務）

野々山翔子（香川大 2015年卒、 2024年10月から当院勤務）

レジデント：

森脇寛（広島大 2021年卒、 2023年4月から当院勤務）

b. 診療実績

外来の診療体制については前年度と同様に、月曜日から金曜日までは午前3診、午後2診で診療し、水曜日の午後には外来手術枠を設け、木曜日の午後には褥瘡回診を行っている。

診療方針としては、原則として主たる疾患群に関してはガイドラインに準拠した診療を基本とし、標準化された治療を行うよう努めるとともに、患者との情報共有に重きを置いて診察している。

外来診療に関しては、2022年度以降、初診患者数、外来延患者数、初診紹介患者数のすべてにおいて数字が伸びており、初診紹介患者数は近年で最も多かった。入院診療に関しては、昨年度に比べ、入院稼働額、新入院患者数、入院延患者数、入院診療単価のすべてにおいて減少傾向であった（表：2020年度～2024年度の外来診療および入院診療における主な実績）。

具体的な診療内容としては、乾癬、アトピー性皮膚炎、蕁麻疹などの主要な皮膚疾患においては生物学的製剤の使用や JAK 阻害薬による内服治療が標準化されてきたため、当科においても、これらの疾患での生物学的製剤や JAK 阻害内服薬の使用が年々増加してきている。地域の医療機関とも積極的に連携しつつ適切に生物学的製剤や JAK 阻害内服薬の導入および維持療法を行うことが出来ている。

当科は、乾癬の診療には特に重点を置いており、外用療法、内服療法、光線療法（ナローバンド UVB、エキシマライト）、生物学的製剤を用いた治療を、症状の重症度や患者のライフスタイルなどを総合的に検討したうえで適切に選択している。2025年3月時点で74例（前年度は64例）に対し生物学的製剤を使用中である。また関節症状を伴う場合には、当院リウマチ膠原病内科と連携し治療を行っている。

アトピー性皮膚炎の治療の基本は外用療法であり、当科の診療においても外用指導を丁寧に行うことを徹底しており、外用指導を含めた教育入院も行っている。その他の治療選択肢として光線治療や免疫抑制薬の内服治療も行っているが、このような既存治療では効果が不十分である場合には生物学的製剤や JAK 阻害内服薬を用いて治療している。2025年3月時点で149例（前年度は63例）に対し生物学的製剤を投与中であり、アトピー性皮膚炎に対する生物学的製剤の使用症例数は年々増加傾向である。また、JAK 阻害内服薬の使用も徐々に増えつつあり、2025年3月時点で18例（前年度は16例）に使用している。

特発性慢性蕁麻疹に関しては、日本皮膚科学会のガイドラインに則った治療選択を基本としており、難治な症例には生物学的製剤を使用しており、2025年3月時点で30例（前年度は15例）に対し生物学的製剤を使用中である。

その他の疾患として、当科は円形脱毛症に関しても積極的に診療に取り組んでおり、ステロイドパルス療法、ステロイド局所注射、局所免疫療法（SADBE を使用）、光線療法、内服療法、外用療法などを組み合わせて治療している。基本的な治療方針は日本皮膚科学会ガイドラインに準拠しており、急性期で広範囲の場合には入院のうえでステロイドパルス療法を行い、慢性期の難治性で広範囲の脱毛症には局所免疫療法を選択していることが多いが、脱毛部位が広範囲に及び難治の場合に JAK 阻害内服薬を選択する症例が増えてきている。

皮膚の良性および悪性腫瘍の治療に関しては、当院形成外科と協力しながら最適な治療を選択するようにしている。また、保険外診療としては、男性型脱毛症治療、陥入爪に対する金属ワイヤー法を実施している。

入院患者の疾患内訳としては、細菌あるいはウイルス感染症が例年同様もっとも多く、その他には、湿疹・皮膚炎群、薬疹、水疱症、皮膚潰瘍、血管炎、円形脱毛症などが入院の対象疾患となっている。2024

年度の入院患者数の内訳は、蜂窩織炎・丹毒などの細菌感染症は40例（前年度48例）、帯状疱疹を含むウイルス感染症は21例（前年度35例）、円形脱毛症は9例（前年度11例）、水疱症は4例、蕁麻疹は2例であった。

他職種とのチーム医療については、看護師専門外来であるフットケア外来と連携を図り、皮膚潰瘍や爪囲炎の発症予防に努めている。また、毎週木曜日の午後には皮膚科医師の他に、看護師、理学/作業療法士、管理栄養士、薬剤師、事務職を交えた多職種での院内の褥瘡回診を実施し褥瘡発生率減少と褥瘡予防の啓発に向け活動している。

皮膚科は他の診療科との関わりが多く、さらに処置も多い診療科であるため、他の診療科の医師や、看護師、事務職などのメディカルスタッフとのコミュニケーションを大切に、円滑な診療のもとで最適な医療を提供することを常に心掛けている。

（表：2020～2024年度の外来診療および入院診療における主な実績）

	延外来患者数	初診患者数	紹介患者数	1日あたり の 在院患者数	新入院患者数
2020年度	15,634	2,743	415	3.1	105
2021年度	15,301	2,678	480	2.6	90
2022年度	14,846	2,582	479	2.4	78
2023年度	15,175	2,701	523	3.5	120
2024年度	15,946	2,851	541	3.5	92

c. 研究実績

【学会】

- 1 森脇寛、臼居志保、山上優奈、古賀玲子、江川行平、吉川義顕 ステロイドと酸化亜鉛外用が奏功した外陰部角化性病変の1例 第117回近畿皮膚科集談会 2024/7/21(大阪)
- 2 森脇寛、臼居志保、野々山翔子、山上優奈、古賀玲子、吉川義顕 Hailey-Hailey病が疑われたInverse Psoriasisの1例 第75回日本皮膚科学会中部支部学術大会 2024/10/12(愛知)
- 3 森脇寛、野々山翔子、山上優奈、古賀玲子、大沢一希、中島俊樹、吉川義顕 クロウン病に伴った壊疽性膿皮症の1例 第488回京滋地方会 2024/12/14(京都)

【論文】

(原著論文・和文)

- 1 千田晃嘉, 衣斐菜々, 臼居志保, 山上優奈, 古賀玲子, 岡田卓也, 富田和輝, 足立靖樹, 西村貴文, 吉川義顕 エンホルツマブベドチン投与中に発症した再発性多発性水疱の1例 皮膚科の臨床 66(9), p1243-1246, 2024 (査読有り)

- 2 衣斐菜々, 千田晃嘉, 山上優奈, 古賀玲子, 磯部葵, 吉川義頭 乳児疥癬の2例 皮膚科の臨床 67(3), p359-363, 2025 (査読有り)
- 3 千田晃嘉, 間宮茉実, 衣斐菜々, 山上優奈, 古賀玲子, 吉川義頭 デュピルマブ投与中に乾癬様皮疹を生じたアトピー性皮膚炎の検討 皮膚病診療 46(12), p1101-1105, 2024 (査読無し)
- 4 吉川義頭 Q: 皮脂欠乏症における剤形の使い分けは? Visual Dermatology 23(11), p1065-1069, 2024 (査読無し)

【研究】

- 1 乾癬における生物学的製剤を基盤とした集学的治療の有用性評価に関する研究
(吉川義頭、古賀玲子、山上優奈、臼居志保)
- 2 円形脱毛症における標準的治療の最適な介入時期とアウトカムに関する研究
(吉川義頭、古賀玲子、山上優奈、臼居志保)
- 3 蕁麻疹の標準的治療と臨床的効果に関する研究
(吉川義頭、古賀玲子、山上優奈、臼居志保)
- 4 アトピー性皮膚炎における標準的治療の有効性の臨床的評価方法に関する研究
(吉川義頭、古賀玲子、山上優奈、臼居志保)